

## 研究余滴 2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3619">http://hdl.handle.net/2297/3619</a>

## 研究余滴

(2)

# 天道是邪非邪

## 『李陵』存疑

上田正行

中島敦の文学を考える時、そこに深い中国哲学、中国文学の素養と西洋哲学への並でない造詣と関心が潜んでいることは何人も認めるところであろう。中島家が祖父の代から儒者の家系である以上、漢学一般への関心、造詣は当然のことであるが、その儒者の系譜から言って、漱石同様、〈左国史漢〉的教養がその根底にあるように思える。これは所謂、詩文・小説類（集部）の狭義の文学ではなく、広く「経」「史」「子」に当たり、その文学観、歴史観、人間観を育てて行ったというところが重要である。経国済民、士大夫的文学観がその根底にあると見ていい。又、当然のことながら中国古典の素養は日本の近代作家には稀な哲学的思弁を身につけさせたが、それは西洋哲学を学ぶことで一層、磨きがかけられた。この西洋の哲学に中島個人の感性と資性が加わり、中島独自の哲学を主張しているのがその文学であろう。言うまでもなく近代人の苦悩が色濃く反映しているところに大きな特質がある。その文学の解明にこれら西洋の哲学の知識が不可欠であるの一言を俟たない。

『悟浄歎異』『山月記』『悟浄出世』『弟子』『李陵』と読み進めて

行くと、そこに紛れもない中国哲学の一つの命題について中島が思索をめぐらしていることが分かる。登場人物は凡て自己に課せられた〈運命〉と向き合い、これを如何に読み解こうかと思案、煩悶を重ねている。この〈天〉〈命〉〈運〉という概念は言うまでもなく中国思想の根幹にあるもので、中国の思想家はこの概念をめぐり、古来、さまざまな解釈を下してきた。その中において最も著名な解釈の一つとして知られるのが司馬遷の「天道是邪非邪」である。『史記』列伝の始めに位置する「伯夷列伝」中のこの一句に司馬遷の史観が明確に語られているとする向きが多い、武田泰淳は「司馬遷は自己の不遇を嘆じ、天道非なりと見た」（『司馬遷』）と断定している。吉川幸次郎の『漢の武帝』（岩波新書）には「司馬遷の『史記』は、武帝の政治に対する不満を、種種の形で明らかにした書物であるといわれる」と述べられている。それらを集約するように『大漢和』では、「天は果して正しいものか、正しくないものか。或は善を行って禍を得、悪を行って福を得るので天道の是非を疑ふ意。天を怨恨する語」とある。「任少卿に報ずる書」に窺える司馬遷の激しい「憤

り」を知らればそれも宣なる哉と思うのである。

『史記』に親しんだ中島にとってこの司馬遷の史観は気掛りなものであつたはずだ。それへの回答として最終的に出されたのが『李陵』であると言つていい。『李陵』は運命に翻弄される三人の男の物語である。又、敢然とこの運命に立ち向かおうとする男の物語でもある。物語の枠組みは既に、『史記』『漢書』『文選』等で決まっております、中島の作家として想像力のはばたける範囲は自ずと限定されるが、それでも中島なりの独自の解釈は見られる。

司馬遷から見て行くと、遷が宮刑を受けたことについては「よりよつて最も醜陋な宮刑にあはうとは！」とあるように、中島はこれを全く予期しなかつた運命と受け取っているが、「報任少卿書」に僅に窺えるように死刑を宣せられながら死一等を減する五十万の贖罪金が払えず、止むなく宮刑を願ひ出たというのが事の真相のようである。屈辱的な刑を受けてまで生を選んだのは言うまでもなく父談の通史を編めという遺言と太史令としての使命感であつた。草稿半ばにしてこの刑に遭つたことを思えば、ここで簡単に死ぬわけにはいかなかつたのである。従つて中島が「斬に遭ふこと、死を賜ふことに対してなら、彼には固より平生から覚悟が出来てゐる」というのは事実「反する。中島は司馬遷を〈男〉として捉え、その〈男〉が最大の恥辱である宮刑を賜つたことに対する混乱ぶりと諦観に行きつくまでの心の動きを追っているが、そのプロセスはやはり中島一流の解釈になつてゐる。

まず武帝を怨みはするが武帝の君主としての力量を否定しきれず、「李陵の禍」を「天の作せる疾風暴雨霹靂」の類に思いなそうとし、

ついにその因を「我在り」という事実を求めるに至る。この諦観、ペシミズムは「天道是邪非邪」と問うた司馬遷の歴史観からは遠い。権力者の悪を不問にするこの認識は逆に天帝の代行者としての皇帝の権力を絶対化するものであり、その権力の及ぶ範囲での出来事のすべてを運命、宿命として受け容れざるを得ない消極的人生観を用意する。〈男〉として受けた最大の恥辱がなぜ、易々とこのような諦観と手を結ぶのか。

それは「人間にはそれ／＼其の人間にふさはしい事件しか起らない」という確信から「どんな事でも起り得るのだ」という認識の転換であり、『山月記』の「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」という人間存在の不条理性にそのまま接続する。中島描くところの司馬遷の運命受容のドラマは、この『山月記』のペシミズムの延長線上にあつたのである。それが中島の司馬遷観であり天道は是でも非でもないのである。天道そのものは気まぐれで不可知であり、そこに貫道する道理などないとする立場であろう。

あとはただ憤怒をひたすら修史という事業にふり向け、自己を抑圧して「書写機械」に徹することである。それが唯一、司馬遷に残された男の意地の発現であつた。これが中島の司馬遷観である。

蘇武造型については、あくまでも李陵の視点からではあるが、これを運命と闘っている男という明確な位置づけを行っている。〈我愛〉を〈大我愛〉にまで鍛え上げ、運命を笑殺せんとしている男という造型は三人の中で最もたくましい〈男〉を感じさせる。蘇武には司馬遷のような屈辱もなければ李陵のような暗い懷疑もない。

意地の権化のような男である。しかし、注意すべきは蘇武は専ら李陵の視点で捉えられていることであり、蘇武そのものが李陵のコンプレックスの裏返しとして人間的に大きく書かれていることである。「天は矢張り見てゐたのだ」という時、それは李陵自らの生き方と対比しての言である。自身と蘇武を比較した時、蘇武の変らぬ「漢節」を持した生き方、その漢への深い愛情に天が応えたということであろうと理解し、その限りで李陵は天を懼れたのである。李陵の目から蘇武を見た時、「天道是也」ということであろう。それは『弟子』の「天は何を見てゐるのだ」に対する中島の一つの回答である。

李陵は運命に翻弄されるかのようにいくつかのボタンのかけ違いに逢った。路博徳の独断、管敢の裏切り、李緒と誤認される、一族の殺戮、と運命は悪く悪く展開した。このような男に自らの生を省みて「天道是也」と言える道理はない。むしろ天は悪意に充ち充ちた邪悪なものであるはずだ。それでは「天道非也」として武帝を怨めばよいのか。しかし、これには蘇武という動かぬ証人がいた。漢と胡に引き裂かれ李陵はいずれとも決めかねる境域に追い込まれていた。それはそのまま「天道是邪非邪」、いずれとも決めかねる立場と呼応している。二者択一的に選択できない状況に李陵はおり、「所与」を〈必然〉とも〈自由〉(『悟浄歎異』)とも受け容れるわけには行かないのである。運命をそのまま受け容れることも、これを笑殺することも李陵にはできない。漢と胡に引き裂かれた宙ぶらりんの状態は独特なもので、司馬遷も蘇武も与り知らないこの状況は勢い李陵を懐疑のワナに陥れる。この懐疑が李陵に「ああ我もと天

人間の「微粒子のみ」の言を吐かせる。この言は「我在り」と共に近代人中島教の苦悩を語るものであろう。その意味ではこの武人にも中島の意識が色濃く投影しているのである。このような李陵に「天道是邪非邪」と迫るのは無意味かも知れない。この懐疑主義者は疾うに天道の絶対ではなく相対的であることを知っているのである。

「天道是邪非邪」に対して中島はその人の置かれた立場により回答は異り、いずれかに与することはできないとする見解を示している。その意味ではこの命題を相対化している。それよりも人間には不可測の出来事が絶えず起こり、それを結果的に我々は受け容れて行くしかないという諦観にも似たペンシズムが中島の運命観だったと言える。そこには日本の暗い谷間の時代を宿痾と闘って生きた近代人の憂愁と苦悩の影が色濃く投影している。それは例えば、「世おのづから教といふもの有りや。有りといへば有るが如く、無しと為せば無きにも似たり」と悠々と語った『運命』(大8・4)の露伴と比較した場合にも明らかなことである。

『李陵』は又、男の意地の物語であったとも言える。司馬遷は意地で『史記』を完成させ、蘇武は意地を通して漢土に還った。李陵も又、意地を通して胡地に散った。三人三様何と壮烈な意地のドラマであろうか。中島の大学院での研究テーマは森鷗外であったが、言うまでもなく『意地』(大2・6)に収められた『興津弥五右衛門の遺書』『阿部一族』『佐橋甚五郎』という意地を通した男の物語に強い関心を持っていたであろうことは想像に難くない。